
わたしとボクのぬくもりの距離。

霜月美由梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたしとボクのぬくもりの距離。

【Z-コード】

Z8566Y

【作者名】

霜月美由梨

【あらすじ】

機織の職の端女である少女が売られ、そして買われた家の物語。

わたしには、名前がない。

物心ついたときにはちゃんと名前があつてそれを呼んでくれるお父さん、お母さんがいたけれど、それもわたしの幼いときに殺されてしまった。

それ以降わたしは、奴隸として朝な夕な機を織る仕事をついていた。そんなある日だった。

「おい」

わたしを呼ぶときはいつもこんな言葉だった。振り向くといきなり腕をつかまれて引きずられて小屋の外に連れ出された。なにかしてしまつただろうか。そう思いながら周りをみると、きらびやかな衣を着た、いかにも身分の高そうな男達が私たちを囲っていた。

「こんなので良いのですか？」

わたしを使っていた男は下心のある目で男達を下から見上げて首をかしげる。わたしだけ、置いてきぼりだ。

「ああ。この女だ。こい」

そういうて男の一人はわたしの腕をとつて強く引っ張った。いつものことだ。わたしは要らなくなつたのだ。

荷物を入れるだけの粗末な馬車に入れられてわたしはそう膝を抱えた。

がたがたと荷馬車は進んでいく。今度の働く場所はどこだらうか。男達の身なりからして、遊郭ではないことは確かだ。甘い香のにおいもしなければ、怪しい雰囲気もなかつた。いうならば、武官のようだ、高潔で近寄りがたい雰囲気があった。

「おい」

また、わたしを呼ぶ声。気がつけば馬車は止まつていて扉を開けられていた。ボロ布をまとつただけのわたしは、ふらふらと馬車から降りて目の前に広がつた大きな屋敷に息を呑んでいた。

「あ……」

「ひかり」

綺麗な衣をまとった女人がわたしを誘導する。首をかしげながらその人についていく。わたしはどこかの家に買われたのだ。

「長旅ご苦労様」

そんなことをいつてくれる女人を不思議に思いながらわたしはあいまいに微笑んだ。

わたしは言葉をしゃべれない。声を失つてしまつてているのだ。

「声が出ないの？」

「くくりとうなずく。かすれた、さつきみたいな声は出るのだが、言葉はまるきりでなくなつてしまつてしている。それはおそらく幼少時の体験のせいだろう。

「いつていることはわかるのよね？」

優しい、いうならばお母さんみたいな聲音で女人人は、わたしのお姉ちゃんぐらゐの年の人はいつた。

わたしはまたうなずく。まともに「飯を食べられていない足には、この屋敷のやわらかい土はきつい。

「大丈夫？」

うなずく。足をとられそうだが、何とか歩けている。だが、すぐに足をとられてしまった。

「おつと」

すぐ上から優しげな男の声が聞こえた。そしてふわりとわたしを包み込むぬくもり。こけたわたしを受け止めてくれたのだ。

「ああ。蓮様」

「この子は？」

「私どもの新しい……」

「この子、あいつにくれないかな？」

「あいつとは、まさか、紅様に？」

驚いた声を上げた女人人にわたしは首をかしげ、そして、優しい香の香りのする衣をつかんで自分で立つた。

「ああ、『めんね。……ああ。だめか?』

「だめって、私どもはそれでも良いですが、でも……」

「『』の子ならあいつも気に入るよ」

そういうてわたしの頬をそおつと撫でた男の人は、声に似合う優しい面立ちに笑みを浮かべた。

「はじめまして。私はこの屋敷の主の蓮だ。キミは、今日から私の家で働くんだよ」

わたしは声を出せないなりに辺りを見回して女人に助けを求めた。

「……『』の子?」

「声が出せないそうです。……なにか聞きたいことがあるの?」
うなずく。紙と筆があれば何とか通じるはず。そつ思つてわたしはしゃがみこんで地面に文字を書いた。

「君、字をかけるんだね。なにに? なにをしたらいいかつて?
それを聞いて、いわれたことをこなすのが君の仕事だ。基本的なもののがみなどを覚えれば簡単な仕事だ。それに、『』の屋敷にある部屋を一つ貸そう。ぜひ、君には私の弟の世話をしてもらいたい」

弟?

そう書くと男の人、蓮さまはうなずいてわたしの頭をそつと撫でた。お父さんにされていたみたいで、とつても優しい気持ちになる。

「ああ、ちょっと気難しいやつだけれども、根はすつゞく優しいやつだ。うるさい侍女は嫌だといつていたから、君の声が出ないのはあいつにとつては良いのかも」

そういうてくすりと笑つた蓮さまにわたしはあいまいに微笑んで立ち上がって一礼した。

「よろしく」

わたしの意志をしつかり理解してくれていたらしい蓮さまにわたしはやつと心からの笑みを浮かべられた。

●、（後書き）

ほとんどの設定など練りあひ上、その場の勢いで書きました。
ので、なんか違ひ、どうか違ひつところは御容赦ください。

そして蓮さまの案内で屋敷をさつとみた。温かくて、それでいて、雨風のちゃんとしのげる家だった。

「そして、ここが君に頼みたい人の部屋だ。紅、入るぞ」
そういうて蓮さまは扉を開けて、自分が入ると、扉を押さえてわたくしが入るのを待つてくれた。

「なんですか？ 兄上」

部屋の奥から男の人の声が聞こえる。髪をまとめたまま、昼寝でもしていたのか。まとめきれずに顔を覆つている鳥羽のよつな髪に寝癖のつけたその人は出てきた。鋭く整つた顔立ちに険をにじませて蓮さまをみて、わたしを見る。

「……この子は？」

「今日からおまえの世話をしてもいい子だ。えつと、名前は？」
わたしは首を振つてきょとんとした。侍女に名前などあるのだろうか。逆に聞きたい気分だった。

「……もしかして名前が？」

蓮さまの呆然とした声にわたしは「くくりとつなづくと、蓮さまの弟君でいらっしゃる、わたしと同じか、すこし上の年の男の人を見上げた。

「……焰」

「え？」

男の人は、そういうてわたしの髪に手を伸ばした。わたしの髪はどここの血を引いているのか、夕日色だった。

「おまえの名は、今日から焰だ」

吸い込まれるよつな黒い瞳にわたしは我知らずに目を奪われていた、そして、こくりとうなずいていた。

「声が出ないと？」

わたしはもう一度うなずく。男の人はすこし困つたよつに眉を寄

せて、蓮さまを呆れたような目でみた。

「もしかして、ボクが前の侍女がうつるといつたからですか？」

「いや、それもあるが、今日帰ってきたらひょいひどいの子が来ていてね。年も近いから友達にも良いと思つて」

「余計なおせつかいを」

「親切な親心や」

きりんと玉が鳴る音がしそうなほど鮮やかに微笑んだ蓮さまに、男の人は深くため息をついて、わたしの肩に手を回して中に案内した。

「とこうことで、私はもう行くからな」

「はい。」苦勞様でした

温かくて大きな手に肩をつかまれてわたしは無意識に男の人に寄り添つていた。

「……とこうことで、まず君は……。お湯殿で体を清めてきなさい

「お……」

ゆびの？ と唇を動かす。そつすると男の人は目を瞬かせて額に手を当てた。

「体を清めるのに、川に行くだろ？？」

「くくりとうなづく。わたしは川で泳ぐのが大好きだ。

「そこまで行くのはここでは面倒だから、水を引いてあるんだ。その水をすこし温めて、ためてあるのだが……そこですこし行水をしてきなさい」

噛み碎いた言葉でそういうてくれる彼の言葉にわたしはこくんとうなづいて、案内されたお湯殿なる場所に入つて、初めての温水を堪能した。

「心地よかつたか？」

邪魔にならないように定期的に切つている髪を綿の布で包んで、今まで來ていた衣よりもずっと柔らかで温かい衣に身を包んだわたしは、彼の側によつてうなづいていた。

「そうか。ならばよかつた。……ボクの名は紅、といつ。覚えてい

てくれ

そういうにはにかんだ彼にわたしがつなずいて一礼した。

「そんなにかしこまらなくて良い。……これからは樂にしてく
れ。すこし聞きたいことがあるのだが、いいか?」

首をかしげてみせると、紅あまはすこしへこしへしおながら
口を開いた。

「声は、まったくでないのか?」

その言葉にわたしは首をかしげて肩をすくめた。正直、どこまで
出るのかはわからなかつた。今までそんなものが必要な職業ではな
かつたから。

「ボクの名をいつて、」

「……オノ……あ……あ」

やつぱり出ない。音の残滓の音が出るだけで、まったく言葉では
なかつた。のどに手を当てて口を伏せたわたしに、彼は口を細めて
小さく笑つた。

「大丈夫。これから出るようになる。完全に音が出てないようなら
ばそつはいえないが、ちゃんと音は出てるから」

ゆつくつ出せるように練習しなこと優しくいつた彼にわたしは
こくんとうなずいていた。

これが、ご主人様の紅あまとのはじめての口のいじだつた。

「焰

「……あー」

一応口を動かしてそういう。言葉ではないがそれでも声を聞いてもらいたくてわたしはいつ。

紅さまとわたしは不思議なほど合つた。割れた石の破片がぴたりとはまつてもとの石を形付くるような不思議な感覚。

「これを兄上のところに届けてくる。君はここで待っていてくれ」うなずいて紅さまが出て行くを見送る。

ここに連れてこられてもう数ヶ月が経つ。夏の一雨が待ち遠しい日差しが和らぎ厳しい冬の気配をおわす秋がすぐそこまで来ていた。

こここの屋敷の人たちはみんな優しかった。侍女以下の仕事をしてきたわたしに、根気よく仕事を教えてくれ、また、普通に話しかけてくれる。それは、侍女などの下働きだけではなく、紅さまをはじめ蓮さまや、蓮さまの奥方様もそういう方だった。

なんとなく、わたしの家を思い出した。わたしの家も、記憶が確かなら、ここまで大きくなきものの侍女はいて、家事を手伝つてくれて、わたしの相手もしてくれていた。

「焰さん」

振り向くとすこし気位の高い侍女の一人がいた。正直、わたしはこの人が苦手だ。

「ああいうのは私たちが行くの。わたしがやりますといって、手の書状をとつて蓮さまのところに行くるのよ?」

すこしきつめの口調でつづなずいて謝るように頭を下げる。

「本当に、声でないの?」

バカにするようなその声。わたしには慣れたその聲音。わたしは頭を上げてうなずく。

「こんなに立派なのどがあるのに、何故出ないのかしらね?」

め」と、手が伸びてわたしの髪をつかむとす。

あー！

わたしはなにが起きたのかわからず、のどをつかまれていた。途端にこみ上げてくる嘔吐感。わたしは顔をゆがめて手をばたつかせていた。

……あして！」

あかんほうがうこぎう

る。どうしても、のど元や、首を触られるのは嫌いだった。それは、父母を殺されたときにわたし自身ものどをつかまれ殺されそうになつたからだろう。

「おお、何が？」

わたしが本気で嫌がっているのをみて小気味よさそうに笑う彼女。そんな人だつたのか。わたしがばたばたと手をさせているのにもかまわずに彼女はのどをつかむ指に力をこめて、本当にのどを握つてきた。

「ああああー!」

瞬間膨れ上がる恐怖。わたしはなにも考えられなくなつて、こぶしを握つて振り回していた。

「危ないじゃない？」

彼女はそこで一息が詰まらない程度に握りてくれる。その時だ。

二
た

鋭い声に、彼女はハッとした顔をしてぱっと離れた。わたしは、ただ狂乱の中にいてわからなかつた。

「貴様はなにをしている！」
暴れるわたしをみて紅さまは驚いた顔をしていたのだと思う。そして、わたしののど元についた赤い手跡に、紅さまは、あうう」とかその侍女の頬を打つた。

「貴様はなにをしている！」

怒鳴る紅さまに侍女は屈辱に顔を赤くさせ、声を震わせて申し訳ございません。からかいがすぎました。と白々しくいってみせる。それでも、紅さまの気は治まらない。

「もうどこへと行くがよい。私はもう貴様の顔などみたくない」そういうと侍女を部屋から追い払い、泣き叫び壁にもたれてがたがたと体を震わせるわたしにそつと近づいてきた。

「大丈夫だ。焰」

「いや、いや」

その時は確かに言葉をしゃべれた。頭を両手で抱えて首を振つていた。紅さまは、わたしに目線を合わせるようになに床に膝をついてわたしの顔を、涙と鼻水でひどいことになつている顔を覗き込んだ。

「焰」

優しい声音。わたしはぼろぼろと涙を流しながら紅さまの優しいお顔を見る。お兄様である蓮さまよりはするいくつも整つて、すこし近づくことをためらわれるような顔立ちは、時にびっくりするぐらい優しい表情をされる。

「もう、大丈夫だ」

そういうつてわたしに両手を差し伸べてそつと抱きこんでくれる。近くにあるはずのぬくもりが遠くにあるような気がした。

わたしは彼の腕の中に長い時間いたんだと思う。そして、気がついたときには、紅さまが使われているふかふかの寝台の上で寝ていた。

「焰、いるか？」

蓮さまのすこし焦つた声。わたしは慌てて体を起こして、着衣の乱れがないかを確認してから寝室から出た。

「ここにいたか。紅は、そこにいるか？」

わたしは首を横に振つた。いつの間にか日が暮れていて、真つ暗な闇の中大粒の雨が降り出していた。

「くそ、あいつどこに家出した？」

めずらしく悪態をつく彼に首をかしげて机の上に書き置きがある

「と元氣づいて田を通した。

「焰？」

「……わる、かつた？ イエン、の、ふぼ、ころした、の、は、…
わが、ちち？」

声が出るにこも驚いたが、その内容にも驚いた。

「……父上が君の父母にも手をかけていたのか？」

「ちち、うえ」

まだ、かすれる声で首をかしげると、蓮さまは嫌な予感がすると
いつて、詳しい話は紅が戻つたらするといつて部屋を出て行つてしまつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8566y/>

わたしとボクのぬくもりの距離。

2011年11月27日19時56分発行